

機関番号：32690

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21830132

研究課題名（和文） 「教育的教授」論を機軸とした学校構想と学校教育改革に関する実証的研究

研究課題名（英文） The Scheme for School Based on “Educative Instruction” and Empirical Study on School Reform in Germany

研究代表者

牛田 伸一 (USHIDA SHINICHI)

創価大学・教育学部・講師

研究者番号：90546128

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、ヘルバルト (Herbart, J. F.) の原典および先行研究を丹念に読み込み、「教育的教授 (erziehender Unterricht)」論に従来の定説とはまったく異なる解釈を施した上で、それが教育思想史研究として意味があったばかりでなく、ドイツの学校教育改革を現実に導くものだったことを証明することにあつた。さらに、「教育的教授」論の新たな解釈が現実の学校教育改革までも動かすことができた理由には、「教育的教授」を試行・実験する学校改革プロジェクトの成果がそこに寄与していたことも明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to prove the fact that the re-conversion of “Educative Instruction” Theory into General Theory of Education is meaningful not only as History of Educational Thought but also as the idea of the actual School Reform in Germany. In addition, the reason why this new or re-interpretation could move School Reform was analyzed. The conclusion of this paper is that results of School Reform Project (Grundschulprojekt Gievenbeck) in Laboratory School that was based on “Educative Instruction” Theory led School Reform.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	660,000	198,000	858,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,560,000	468,000	2,028,000

研究分野：学校教育学、ドイツ教授学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：教育学、ドイツ教授学、ヘルバルト、「教育的教授」論、改革教育学、学校教育改革

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の動機は、報告者のこれまでの「教育的教授 (erziehender Unterricht)」に関する研究成果から得られたものである。これらがこの研究の背景となっている。

一つは、ヘルバルトの構想した「教育的教授」は、近代学校の枠の中では、到底、実践できるものではなかったことを明らかにした研究(牛田, 2006)である。この一つ目の研究の結論は、ヘルバルト自身が「教育的教授」と近代学校の関係をどう捉えていたのか、と

いう問いを報告者に投げかけた。

そしてそれに答えたのが二つ目の研究である(牛田, 2008a)。そこで明確になったのは、予想に反して、彼が当時の近代学校を「教育的教授」論を武器に痛烈に批判していたこと、逆に「教育的教授」論を近代学校のオルターナティブの中心軸として位置づけていた事実だった。

その研究に着手しヘルバルトの原典と二次文献を参照する中で、彼の「教育的教授」論の近代学校批判を正確に捉え、「教育的教授」の要請する所から学校のオルターナティブを志向した野心的試みが、ドイツ・ノルトライン・ヴェストファーレン州(Land Nordrhein-Westfalen)においてすでに取り組まれていたことに気づかされた(牛田, 2008b)。

いわゆる「近代学校教授学」に対する疑義を表明していた報告者は、教育学の基礎理論から学校そのもののあり方を規定したモデル校とその成果の学校教育改革への反映の過程と帰結を追跡して、教育学の基礎理論と学校教育改革の間にある問題圏を探り当てる必要に迫られた。

以上が、本研究の動機ならびに背景である。

#### 【参考文献】

- 牛田伸一. (2006)「プランゲの学校における教育不要論の論理」『教育方法学研究(第31巻)』(日本教育方法学会)、49～60頁。  
牛田伸一. (2008a)「学校批判としての『教育的教授』論」『教育方法学研究(第33巻)』(日本教育方法学会)、109～120頁。  
牛田伸一. (2008b)「『教育的教授』論とギーフェンベック基礎学校プロジェクト」(2008年度第44回教育方法学会大会発表用原稿)。

## 2. 研究の目的

ヘルバルトは、教授段階説を提唱した人物だと一般的には認知され、そのため彼の「教育的教授」論も学校の道德主義の知識伝達の方法に過ぎないと考えられてきた。しかし、1970年代半ばから丹念に彼の原典が読み込まれ、「教育的教授」論は単なる教授技法ではなく、人間形成の基礎理論だということが指摘された(Benner, 1976)。しかも彼が、学校のあり方はこの基礎理論に従い決められるべきだと主張していたことも明らかにされた(Herbart, 1810)。このようにヘルバルト教育学研究は教育思想史研究として新たに展開を見せていたが、この先行研究を踏まえつつも(牛田, 2008a)、本研究の主眼は、彼の「教育的教授」論が思想史研究の意味を

持っていただけでなく、(西)ドイツの現実の学校教育改革を推し進める理論的より所だったことを証明することにあつた。これが本研究の目的となった。

この達成のため、「教育的教授」の新しい解釈が現実の学校教育改革を突き動かした理由には、「教育的教授」の基礎理論から構想されたモデル学校の成果があつたことに特に注目しなければならなかつた。このモデル校とは、西ドイツ(当時)・ノルトライン・ヴェストファーレン州において、1977～83年の間に実施された「ギーフェンベック基礎学校プロジェクト」(Grundschulprojekt Gievenbeck——以下、「基礎学校プロジェクト」と表記)のことである。なぜなら、この成果に基づき、同州の1985年版の基礎(初等)学校の学習指導要領が改訂されたと予想されたからである。

本研究の目的は次のようにまとめられ得た。ヘルバルト(Herbart, J. F.)の原典および先行研究を丹念に読み込み、「教育的教授」論に従来の定説とはまったく異なる解釈を施した上で、それが教育思想史研究として意味があつたばかりでなく、ドイツの学校教育改革を現実に導くものだったことを証明することにあつた。

#### 【参考文献】

- Benner, D. (1976): Herbart als Schultheoretiker. In: Busch, F. W./Raapke, H.-D. (Hrsg.): Johann Friedrich Herbart. Leben und Werk in den Widersprüchen seiner Zeit. Oldenburg.  
Benner, D./Ramseger, J. (1981): Wenn die Schule sich öffnet. Erfahrungen aus dem Grundschulprojekt Gievenbeck. München.  
原田信之・田口淳. (1990). 「BRDの学習指導要領にみる訓育的教授の検討」『高松工業高等専門学校研究紀要(第26号)』(高松工業高等専門学校)、117～132頁。  
Herbart, J. F. (1810). Über Erziehung unter öffentlicher Mitwirkung. In: Asmus, W. (Hrsg.): Pädagogische Schriften. Düsseldorf 1964.  
牛田伸一. (2008a)「学校批判としての『教育的教授』論」『教育方法学研究(第33巻)』(日本教育方法学会)、109～120頁。

## 3. 研究の方法

上記の研究目的を達成するため実施された研究の手続き(方法)は、年度ごとに整理すると、次のようにまとめられる。

### (1) 2009年度の研究

2009年度には研究課題の二つの柱があつた。

一つは、「教育的教授」論と近代学校の関

係を、報告者によるこれまでの先行研究をより具体的に掘り下げ明らかにすることになった。この関係に迫るための関連文献の取捨選択と解釈の問題観点は、次のように整理され、その解説が取り組まれた。

- ・ ヘルバルトの学校論を直接にも間接にも対象にした研究かどうかの観点。
- ・ あるいはまた、彼の「教育的教授」論を直接にも間接にも対象にした研究かどうかの観点。

ここでは、ヘルバルトの「教育的教授」論が「近代学校教授学」の代表格だと解釈は誤解であって、本来は「教育的教授」論を武器に近代学校とその教授学のオルターナティブを志向していたということを原典資料の精読に基づき明らかにすることを試みた。

2009年度の研究課題のもう一つの柱は、近代学校が抱える問題を認識するばかりでなく、その克服の際に、ヘルバルトの「教育的教授」論を参照し、それに基づいて試行・実験された学校改革プロジェクトの全体像を復元することになった。それは、ドイツ・ミュンスターに位置するヴァルトブルク基礎学校(Wartburg Grundschule)を舞台に、1977年-1983年に実施された「基礎学校プロジェクト」のことになった。

報告者は、2009年度3月に当該学校を訪問・調査して、当時の学校教育構想（「教育的教授」論）が2009年現在でも継続されているという感触を得た。その実証のために、当該プロジェクトの理論的基盤を構想した研究者にインタビュー調査を実施(Benner教授、Ramseger教授)するとともに、ベルリン自由大学に保管されている当該プロジェクトに関する記録の参照作業の一部を済ませた。

## (2)2010年度

2010年度には研究課題の二つの柱があった。

一つは、昨年度に収集した「ギーフェンバック基礎学校プロジェクト」に関する一次資料を精査することになった。

テキスト解釈の観点は次のように整理された。

- ・ 「方法的開放性」
- ・ 「テーマ的開放性」
- ・ 「制度的開放性」

これら理論枠組みから考察を加え、その学校構想の全体を把握することを試みた。

研究課題のもう一つは、ノルトライン・ヴェストファーレン州の85年版学習指導要領に対する「基礎学校プロジェクト」の影響関係を精査することになった。申請時の計画では、デュッセルドルフ(Düsseldorf)にある州文部省を訪問する予定であったが、事前に確認したところ、同州のカリキュラム開発研究

所に必要資料が移管されていることが判明したので、訪問先を変更しなければならなかった。

同カリキュラム開発研究所では、行政文書の閲覧と複写作業に取り組むことにした。とりわけ、80年代当時の教育改革議論において、「教育的なもの」をどのように学校教育の中に取り入れていくか、との議論が活発に交わされ、そうした時代的な議論が「基礎学校プロジェクト」を経由し、最終的に85年版学習指導要領の「教育的教授」の項目作成につながっている、との見通しが得られた。

## 4. 研究成果

3の研究方法に準拠しつつ、研究成果を具体的な成果物との関連で整理すると、次のように提示することができる。

2009年度の一つ目の課題であった、「教育的教授」論と近代学校の関係を詳細に明らかにすること、については、日本学校教育学会の研究紀要『学校教育研究(第24号)』に掲載した論文『「教育的教授」論と教科指導(学校教授)』にまとめた。そこでは、ヘルバルトが近代学校教育における「教育的教授」論の困難性を認識していたこと、そしてその理由が究明されている。

09年度の二つ目の課題と2010年度の一つ目の課題、すなわち「ギーフェンバック基礎学校プロジェクト」の復元作業であるが、実地調査ならびに一次資料の収集によって、おおよそ把握が可能になった。収集資料の過多ゆえに、いまだすべてをまとめ切れているわけではないにしても、「教育的教授」論は、いわゆるオープン・スクールとして具現化されたことを明らかにすることができた。この成果は、2010年度の日本教育方法学会大会において、「ギーフェンバック基礎学校プロジェクトの学校構想とその実際」とのテーマで発表を済ませ、一定の成果が得られている。

2010年度のもう一つの課題であった、ノルトライン・ヴェストファーレン州の85年版学習指導要領に対する「基礎学校プロジェクト」の影響関係を精査については、2010年度2-3月に収集した資料に基づいて、目下、研究論文を作成中である。

なお、本研究の密接に関係する成果として、以下の学術図書(『「教育的教授」論における学校批判と学校構想に関する研究——教授学的学校論研究の「序説」に代えて』協同出版、2010年)を出版した。特に第六章には、本研究に成果の一部が収められている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

牛田伸一『『教育的教授』論と教科指導(学校教授)』『学校教育研究(第24号)』(日本学校教育学会、2009年)、32-44頁、査読あり。

〔学会発表〕(計1件)

牛田伸一「ゲーフェンベック基礎学校プロジェクトの学校構想とその実際」日本教育方法学会、2010年度(第46回)日本教育方法学会大会、2010年10月10日、国士舘大学。

〔図書〕(計1件)

牛田伸一『『教育的教授』論における学校批判と学校構想に関する研究——教授学的学校論研究の「序説」に代えて』協同出版、2010年、318頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

牛田 伸一 (USHIDA SHINICHI)  
創価大学・教育学部・講師  
研究者番号：90546128

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：